

3.ワークショップ形式での実態調査について

3.1 かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）における意見聴取の結果

つぎに、下記要領にて実施した、かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）における子どもの居場所に関する意見聴取の概要とその結果を記す。

3.1.1.趣旨

子どもの居場所に関する実態調査について、量的調査と併せて、質的調査により、立体的な意見聴取を行うことを目的とする。鹿児島県内各地に在住し、本実態調査事業の調査対象とはなっていないが、居場所を必要とする子ども・若者及び保護者の意見を聴取することで、その特徴や居場所に求めるものに違いがあるか、加えて、子ども・若者への支援機関が居場所に求めているものを捉えることを意図として行うものである。

3.1.2.実施方法

かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）を利用する相談者及び保護者に対し、相談員 3 名が口頭による聴き取りを行う。相談員に対する質問はアンケート形式での意見聴取を行った。

3.1.3.聴取する意見

本事業の調査対象とはならないが、居場所を必要とする 18 歳未満の子ども・若者及び保護者の意見から社会資源と行政への意見提言を聴取する。

問は、量的調査に用いた調査票を元に、以下の内容とした。

- ・居場所を求める（利用している）子どもの声
- ・居場所を求める（利用している）保護者の声
- ・相談員として居場所に求めるものとは

3.1.4.実施場所

かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）

3.1.5.対象者

- ・ かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）にて相談されている子ども・若者及び保護者
- ・ かごしま子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター）相談員

3.1.6.実施期間

令和7年2月4日（火）～令和7年3月9日（日）

3.1.7.倫理的配慮

調査への協力は、回答者の自由意志であること、聴き取りの対象となった方の氏名等及びその内容は個人が特定されるものではないこと、得られた情報は今回の調査目的以外では使用しないことを説明した。

3.1.8.結果

18歳未満の子ども・若者 8名、保護者 6名、相談員 3名にご協力いただいた。

3.1.9.意見の概要

(1) 居場所を求める子どもの声

【友だち】

- ・ 友だちを作れる場。
- ・ 同じ立場（不登校・校種）の子と話がしたい。
- ・ オンラインでのつながりではなく、会って話をしたい。

【学習】

- ・ 学習の遅れや分からないことが不安。
- ・ 少人数か個別で教えてくれるところが欲しい。
- ・ 勉強のことは気になるので、わからないことは教えてもらいたい。

【居場所に求めること】

- ・ 好きなアニメやゲームの話をしたい。
- ・ 勉強以外のこともできる場。
- ・ 無理していかななくてもいい場所。

【その他】

- ・家が安心できるから、別にいかななくてもいい。
- ・本当は学校に行きたいし、行けば楽しいのはわかっている。

(2) 居場所を利用している子どもの声

【人間関係】

- ・スタッフが年上で優しくしてくれるのでうれしい。
- ・いろんな年代の子がいる。

【活動内容】

- ・公園で身体を動かせるのが楽しい。

【その他】

- ・変わるきっかけにしたい。
- ・とりあえず参加して、自分がどう変わるか。
- ・疲れる。

(3) 居場所を求める保護者の声

【学習支援】

- ・勉強を教えてくれるところを知りたい。

【交流】

- ・同じような経験をした人が集まれる場所なら、安心して話せそう。元気になりそう。
- ・家庭内で家族だけとの交流ではなく、家族以外の他者と繋がって欲しい。
- ・ネット上の交流は不安。顔が見えて安心・安全が保障された上で利用できる場所が欲しい。

【その他】

- ・子どもだけで通えるような立地条件だと助かる。
- ・そういう場所にいつて欲しいけど、行きたいと言わないから無理には言えない。

(4) 居場所を利用している保護者の声

【人との関わり】

- ・できるだけ居場所に行ってほしい。

- ・本人が話を聴いてもらったり、大切にされたりすることで、居場所の時間を楽しみにしており、元気になっている。
- ・塾で勉強をみてもらうのを楽しみにしており、元気になっている。自分のペースでできるからいいのかもしれない。

(5) 相談員はどんな居場所につなぐことが多いか

【内容】

- ・学習支援をおこなっている居場所。
- ・趣味やあそびも大事にしている居場所。

【連携】

- ・支援機関・支援者との繋がりがあり、支援方針を共有できている場所。
- ・居場所へ繋いだ後の情報共有が出来る場所。

【その他】

- ・営利目的及び高額な利用料が発生しない場所。

(6) これから求められる「居場所」とは？

【安心基地】

- ・定期開催とは別に、常時開いていていつでも行ける居場所。
- ・スタッフが常駐して安全と安心感が確保できる。
- ・ふらっと立ち寄って愚痴を言える。
- ・「あそこに行けばどうにかなる」と思える。
- ・居場所の利用者自身が企画・運営に携われるような自治的な居場所。

【柔軟性】

- ・興味を引くいろんな文化に触れられる場所。
- ・学習支援・心理的安定・進路相談等など、利用者のニーズに応じられる居場所。

【家族支援】

- ・保護者・家族支援が出来る居場所。

【連携支援】

- ・学校や教育機関・就労機関等、情報共有と連携が出来る居場所。

3.2 「鹿児島市精神保健福祉交流センターにおける実態調査」による意見聴取の結果

つぎに、下記要領にて実施した、鹿児島市精神保健福祉交流センターにおける子どもの居場所に係るアンケート形式での意見聴取の概要とその結果を記す。

3.2.1. 趣旨

子どもの居場所調査について、量的調査と併せて、質的調査により、立体的な意見聴取を行うことを目的とする。

3.2.2. 実施方法

鹿児島県精神保健福祉士協会が鹿児島市の指定管理事業で運営を行っている鹿児島市精神保健福祉交流センターにおいて、アンケート調査票を設置し、かつての経験者、その家族を対象としてアンケート形式での意見聴取を行う。

3.2.3. 聴取する意見

経験者（当事者、家族）としての子どもの居場所に関する社会資源と行政への意見提言を聴取する。問は、量的調査に用いた調査票を元に、以下の内容とした。

- ・不登校になったときに、どんなところなら行きたいと思ったか、どんな支援があったらよかったか
- ・自分の子どもが不登校になったとき困っていたこと、どんな支援があったらよかったか
- ・心がけていたこと

3.2.4. 実施場所

鹿児島市精神保健福祉交流センター

3.2.5. 対象者

鹿児島市精神保健福祉交流センター利用者

（精神疾患のある方、精神疾患のある方の家族、支援者、その他）

3.2.6. 実施期間

令和7年1月24日（月）～令和7年2月28日（金）

3.2.7. 倫理的配慮

調査への協力は、回答者の自由意志であること、アンケート用紙は無記名で実施し、個人が特定される内容ではないこと、得られた情報は今回の調査目的以外では使用しないことを説明した。アンケートの回答をもって同意を得た。

3.2.8. 結果

以下の通り 23 名（内訳：経験者 19 名、家族 4 名）の回答があった。

回答者の属性は、精神疾患のある方 15 名、精神疾患のある方の家族 1 名、支援者 1 名
その他 4 名、未記入 3 名（複数回答あり）

3.2.9. アンケートによる意見の概要

（1）経験者の声

問1 不登校になったときに、どんなところなら行きたいと思ったか。

【学校】

- ・1年生の時の出来ないことを出来るまで放置する先生のいないところ。
- ・嫌いな授業を回避できるような体系になっているところ。
- ・嫌い、苦手な行事をしなくてもいいところ。

【学校以外】

- ・遊べて自由にいられる場所に行ってみたい。
- ・話をきいてくれるところ。
- ・安心できる場所。
- ・勉強ができるところ。
- ・出来ないことをからかってくる子がいないところ。
- ・勉強に関係ないところ。
- ・海。
- ・どこか遠く。
- ・権利擁護できる場。

【その他】

- ・どこにも行きたくなかった。学校の先生も、親も、学校に行けと言わずにそっとしておいてほしかった。
- ・行かなければならない、と思っていたので、そのような（別の場所）考えが浮かばなかった。

子どもの居場所においては、たくさんの選択肢の中から、自らが選択できることが重要であることが考えられる。また、回答内容から不登校の渦中においては、居場所を選択する精神的な余裕が

なくなることも伺え、不登校になる前から子どもたちにとって、子どもの居場所が身近な存在であるよう普及啓発が望まれると考える。

問2 不登校になったときに、周りからどんな支援があったらよかったか？

【居場所】

- ・居ても良い場所。
- ・好きなことができる場所があればよかった。
- ・個別教室。

【周囲からの対応】

- ・あのころは気づけなかったが、今は先生たちは先生たちなりに支援してくれていたと気づけた。だからといって、行けていたとは思えない。
- ・第三者の目から見てほしかった。
- ・話を聞いてほしかった。
- ・腫れものに触るような扱いをしてほしくなかった。普通に接してほしかった。
- ・ほっといてほしかった。やたらと干渉があり。（毎日学級委員が先生に言われて迎えに来たりする）
- ・みんなで話し合いを1回してみたらいいと思う。
- ・理解してほしかった。
- ・傾聴。

【選択できること】

- ・そんなに嫌ならしなくても大丈夫と、自由に気にすることなく選ぶことができる状況だったらよかったと思う。
- ・別の場所がある提案をアドバイスしてほしかった。
- ・こんな支援がある、と教えてほしい。

不登校であった時に、周囲に対して、ありのままの自分を受け入れ、不安や辛さを受け止め、子ども自身のペースを尊重し、見守る対応を望んでいることが読み取れた。また、居場所や支援の情報を望んでいることも読み取れた。

問3 不登校になったときに、心がけていたこと

【自分のメンタルヘルス】

- ・無理に行く必要はない。
- ・一人ではないと言い聞かせる。
- ・休養する。
- ・自分のところに素直になること。
- ・なるべくゆっくり過ごす。

- ・気持ちの整理、もし話せる人がいれば相談する。
- ・切り替えるようにしていた。

【家での過ごし方】

- ・体調のいい時に勉強をしたり、本を読んだりしていた。

【学校のこと】

- ・週に2回は行こうと家族と約束していた。それでも行きたくないときは行かなかった。

不登校であっても、自身のメンタルヘルスを保つための工夫をされており、そういった子ども自身の強みにも着目する視点が大切であると考えられる。

2（2）家族の声

問1 不登校になったときに、困っていたこと

【学校の対応】

- ・どうしたらよいか分からないので教師の言う通りにしていたが、先生たちも言う事がコロコロかわって本当にどうすることが良いのか全く分からなかった。

【家族としての対応】

- ・行くよう声かけすべきか、休んでいいと声かけすべきかの判断。

家族は、不登校という現状への不安、戸惑い、学校へ登校させるか休ませるかの葛藤等、様々な感情を抱えていることが読み取れた。

問2 不登校になったときに、周りからどんな支援があったらよかったか？

①親への支援

【相談先】

- ・親としてどう接する事が正しいのか、ぶれずに教えてくれる方がいたらよかったと思う。

【学校とのつながり、オンラインの充実】

- ・学校での様子を要望に応じてフィードバック（学校→保護者）、対面でなくリモートおよび文書可。

【経験者、当事者とのつながり】

- ・他ケースの情報。

【周囲の見守り】

- ・子どもが学校に行かないことについて、責めたりせず、静かに見守ってほしい。

先に記載のとおり、様々な感情を抱える家族に対して、寄り添う存在は必要である。家族が落ち着いて過ごすことができることで、子どもも安心して休むことができると考える。親への支援としては、学校での対応だけでなく、地域の専門家や相談機関の支援に加え、親の会などのセルフヘルプグループなどが考えられる。特に、親の会などのセルフヘルプグループにおいては、同じ境遇である親やかつての経験者である親から具体的なアドバイスを得られることもあり、また、同じ立場であるからこそ安心して心情を吐露でき、親の抱える感情を整理し、不安な気持ちを和らげることができる。親の会などのセルフヘルプグループの存在を知らない家族も多いことから、普及啓発し、広く知ってもらうことで、同じ境遇を持つ親の居場所や心のよりどころになることが考えられる。

②子どもへの支援

【子どもへの対応】

- ・子どもは大人の事をよく見ているので、言っていることがこの前と今と違う事が続くと、その時点で子どもは線引きをする。難しいことだけど、根気よく子どもに沿った対応をしてくれる方がいてくれたら助かる。
- ・信じる（親として）。

【専門家】

- ・カウンセラーの介入。

【学習面】

- ・郊外での学習指導。

【居場所】

- ・親が子どもを見守ることができない状況の時に見守りしてくれる場所、人。
- ・居場所（フリースクール等）の整備。

子どもへの支援としては、それぞれの子どもの特性に沿った対応、専門家へのつなぎ、居場所や子どもに合った学習面のフォロー、地域住民の見守り等様々な社会資源を求めていることが読み取れた。

問3 不登校になったときに、親として心がけていたこと

【子どものペースの尊重】

- ・最初は無理しても学校へ引きずるように連れて行ったが、途中から（児童相談所）でそれはよくない事だったと知り、それ以降は、無理じいをしないようにしていた。
- ・午前中だけとか約束をしたら守るようにしていた。

【子どもの声の尊重】

- ・子の言葉をしっかり聞く。質問せめにせず見守りたい。
- ・子どもが今何を感じているか、どう思っているか、どうしたいかを聞いていけるよう心がけていた。

【見守り】

- ・学校に行かなくなった時は今のところなし。中・高になった場合、本人にまかせて静かに見守りたい。場合によっては、転校も。
- ・年齢にもよると思うが、低学年なら、一緒に行って見守ってあげる。高学年なら親に伝える。

家族は、不安を抱えながらも、子ども向き合い、見守る対応をされていたことが読み取れる。不登校の家族が孤立しないよう、心理的支援、経済的支援、専門機関の支援、地域の見守り等を包括的に実施し、地域全体で子どもとその家族を支える仕組みの構築が必要であると考えます。

3.3.地域特性に着目したワークショップ形式での実態調査

つぎに、下記要領にて実施した、奄美地域における子どもの居場所に係るワークショップ形式での意見聴取の概要と結果を記す。

3.3.1. 趣旨

子どもの居場所調査について、量的調査と併せて、質的調査により、立体的な意見聴取を行うことを目的とする。その際、鹿児島県の特徴として離島を多く抱える地域であり、その地域特性をとらえる意図として、奄美地域でのワークショップを行うものである。

3.3.2. 実施方法

奄美地域の鹿児島県精神保健福祉士協会の協会員で調査研究委員会メンバーである奄美病院の精神保健福祉士の持つネットワークを活用し、児童を持つ保護者を対象としてワークショップ形式での意見聴取を行う。

方法は、量的調査を実施した調査票の内容を基に、多様な意見を付箋に書いてもらい、それを発想法であるK J法を参考とした質的分析法を用いて聴取する。

現地でのコーディネーターと共に、鹿児島市内よりZ o o mで現地と通信をつなぎ、司会進行や調査補助を行う。

3.3.3. 聴取する意見

離島という地域特性に沿った子どもの居場所に関する社会資源と行政への意見提言を聴取する。問は、量的調査に用いた調査票を基に、以下の2点とした。

- ・登校できなくなって、実際に困ったこと、自分の子どもが登校できなくなったら考えること
- ・登校できなくなったときなど、子どもの居場所に関しての困りごとがあったとき、どういった社会資源があったら良いか、行政への要望、一緒に取り組んでいきたいこと

3.3.4. 対象地域と実施場所

対象地域：奄美地域

実施場所：奄美病院(県精神保健福祉士協会員コーディネーター勤務地)

→場所と協力者への依頼文を作成して会場の責任者への確認を行う。

3.3.5. 対象者

奄美地域で児童を持つ保護者(長期欠席となっている子どもの有無について今回は問わない)

3.3.6. 実施時期

令和7年3月1日(土)

3.3.7. 倫理的配慮

調査依頼時にワークショップの趣旨を伝え、ワークショップ開催に際して匿名化の徹底などを伝え、了解を得る。実施前に承諾書を取り交わす。

3.3.8. 結果

以下の通り、参加者6名の協力を得て実施した。

日 時：令和7年3月1日（土） 13:30～15:30

場 所：奄美病院 ※オンラインを活用し、志學館大学よりファシリテートを実施

出席者：参加者 6名(現地コーディネーターを含む)

司会進行・記録 2名

当日資料：ワークショップ承諾書

ワークショップ説明文書

→開始前に趣旨説明の上、承諾書を取り交わした。

3.3.9. ワークショップ形式による意見の概要

以下、当日のワークショップで挙げた意見の内、カード化して成果物内に挙げた意見を記す。
当日参加者同士で出た意見をカードにして寄り集め、共通する意見についてカテゴリー分けを行ってもらい、そのカテゴリー分けに付けたタイトルを【】で記した。

問1(ワーク①) 学校に登校できなくなって、実際に困ったこと、自分の子どもが学校に登校できなくなったら考えること

【相談先】

- ・まず誰に相談したらよいか分からない
- ・親も子も孤独
- ・誰にいつ相談したらいいか分からない
- ・先生とうまく相談できない
- ・会の有無も分からず情報取れず
- ・どのタイミングで先生に相談するのか…

【家での過ごし方】

- ・子どもを一人にして良いのか悩む
- ・休んだ時に家でずっとゲーム→これで良いの？
- ・家で何をして過ごすのか
- ・一人子を家に残すつらさ

【子どもへの対応】

- ・どのように対応したら良いか
- ・何が正解？

- ・子どもへのことばかけ
- ・子どもに何て声かければいいのか？どう対応？

【学習のこと】

- ・勉強についていけない
- ・勉強をどう教えたら良いか
- ・勉強はどうする？親が教える？

【仕事との葛藤】

- ・仕事に遅刻してしまう…
- ・死んでいないか心配で家に帰る
- ・仕事に行けない
- ・仕事に集中できない
- ・長期化した時の仕事の調整

【学校の対応】

- ・学校がどこまで対応できるのか？
- ・学校の対応に× 保健室× バス×
- ・学校での過ごし方（ずっと保健室は…）
- ・学校の先生で天地の差
- ・学校の対応に○ 保健室他 OK オンライン、フリースクール送り OK

【家族】

- ・夫との意見の違い（1）
- ・夫との意見の違い（2）

【地域性】

- ・2クラスのみ、ずっと一緒…
- ・周りの目（他の保護者や身内）

【親のストレス】

- ・自分のイライラ
- ・親の不安やイライラ
- ・このままずっと行けないのではないかという不安
- ・本人の気持ちより親の焦りが強くなってしまう

【昼ごはん（お金も…）】

- ・お昼ごはんの準備
- ・昼食の準備

【兄弟児のフォロー】

- ・下の子だけ保育園へ行かせることに下の子が怒る
- ・兄へのフォロー

問2（ワーク②） 登校できなくなったときなど、子どもの居場所に関しての困りごとがあったとき、どういった社会資源があったら良いか、行政への要望、一緒に取り組んでいきたいこと

【経験者とのつながり】

- ・同じ悩みを持つ親と話せる場
- ・先輩ママの話が聴ける場
- ・気軽に相談できる場

【オンラインの充実】

- ・自宅でも学習できる仕組み（システム）
- ・学校用のタブレットに学習プリントの配信（チャレンジみたいな）
→大学などと共同開発したらどうか

【居場所の選択】

- ・学校、家どちらでも OK という時代へ
- ・学校一択でない場所（学校同様に公金）
- ・フリースクールが増えてほしい

【普及・啓発】

- ・学校（先生）への方針の理解
- ・地域への周知や理解の普及
- ・鹿児島県のまじめすぎる教育
- ・職場の理解
- ・家族全員が学校とつながる（夫への説明）

【新たな社会資源】

- ・色々な道を（方法）を教えてくれる人
- ・学校以外の選択肢を分かりやすく示してあるもの
- ・家に訪問して話を聴いてくれる人
- ・送迎付きの居場所

- ・費用への配慮（スクール、バス、昼食）
- ・給食費の負担軽減
- ・お弁当チケット（お弁当屋さんで使える）
- ・フリースクール費用の補助



図 3-3-1 ワーク①における成果物



図 3-3-2 ワーク①における成果物

教員もどのタイミングで介入するのか悩むことが想定される。子どもが休み始めたときには対応するが、教員も保護者側も、本格的な介入の時期について悩むのではないかと考える。

【家での過ごし方】

- ・子ども一人を自宅に残して職場へ行くわけにはいかないため、学校へ行かせた方が良いのかどうか悩むが、休んだ時は一日中ゲームを行っていることが多い。

子どもの対応のため、職場に遅刻や早退などの相談をして理解してもらったという方もいた。また、子どもの対応と仕事への責任との間に生まれる葛藤から仕事との折り合いが難しい方もいるのではないかと考える。

学校に無理やり行かせるのも良くないという想いや学校に登校できない状況が続くことへの不安など、様々な感情があるのではないかと考える。

【子どもへの対応】

- ・子どもに対してどのように声をかけてあげれば良いのか分からない。

先に触れたように、学校に無理やり行かせるのも良くないという想いや学校に登校できない状況が続くことへの不安からくる葛藤もあるのではないかと考える。

働いている親の方が多く、実際に子どもを家に一人にさせておくことへの強い心配がある。様々な社会資源（見守り、地域の方の協力）があると良いのではないかと考える。子どもだけでなく、親に対しても不安を吐露できる場所をつくることで、子どもに対して心穏やかに接することができるのではないかと考える。

【学習・食事のこと】

- ・不登校になると子どもが学校の学習についていけなくなるのではないかと心配になる。その反面、チャレンジといったパットを使って自宅で学習を行っていた。
- ・学習に関して親が子どもに教えることになるが、イライラしてしまうことがある。
- ・子ども食堂などの子どもの居場所はあるが、単発やイベント的なもの。いつでも居ることができる場所は多くない（知られていない）。

学校に行かなくても学ぶことができる環境が整ってきているが、どこの地域においても平等な学習機会が提供できるように、普及と活用していけることが望まれると考える。

学習について、親は教育の専門家ではなく、十分な時間を確保して教育を行うことも困難である。家事や仕事と教育との両立といったことについて、親側の精神的な負担が生じることが読み取れる。

親が子どもの学習や食事などに対する不安を抱えているが、長い期間学校へ行けていないことに対しての受容から最終的には生きていてくれればそれでいいという気持ちになるといった声が聴かれた。

【仕事との葛藤】

- ・子どもが大泣きしながらでも学校へ行っていた時期があったが、朝の時間帯は子どもの通学のフォローをしており、その結果仕事や業務が遅れ、自分の仕事のやり方についても考えることがあった。また、家に子どもを残している間は死んでいるんじゃないかどうかと心配で仕事も集中ができない。

義務教育という制度が登校することを前提としているため、登校しない子どもに教育を行うことを想定していないのではないかと。そのため、子どもが登校できなくなると、仕事を持つ親は、これまでの当たり前にできていた仕事が難しくなり、仕事と子どもへの対応との間に様々な葛藤を生じることがわかる。また、登校することを目標とした対応となっているものと思われる。登校している子もしていない子もありのまま受け止め、等しく教育が受けられる、そういった選択肢があってもいいのではないかと考えられる。

【学校の対応】

- ・学校自体がどこまで個別対応やフォローをしてもらえるのか分からない。
- ・保健室での過ごし方にも学校ごとにローカルな制限があったため困った。

学校に登校できなくなっている子どもや発達特性のある子どもへの対応は、学校だけでは限界がある。現状として、学校と専門機関との連携は十分とはいえない。地域の専門職と連携し、学校の中だけで完結してしまわないようにしていくことが必要と考えられる。

学校ごとに対応が異なることにより、格差が生じてしまう可能性がある。対応が統一することで親同士が情報を共有しやすくなるのではないかと考えられる。

【家族】

- ・子どもの教育のことについて夫や姑との意見が合わず、身内の目と周りの目が気になることがあった。加えて、支援に入る際に夫との意見のすれ違いがあったため、家族で話のすり合わせが必要だと感じた。また、夫や親族等との関係性は大切であるが、学校との関わりを中心は母親になってしまう事が多いため、夫等との子どもに対する理解度に違いがある場合、きつさを感じる部分もあった。

子どもの教育のことについては、母親に負担が集中していることが読み取れる。さらに、学校に行くことができないことに対する認識の違いが社会に根付いているようにも感じられる。

母以外の家族にも状況をしっかり説明することにより、家族間での理解度の齟齬を減らすことができるのではないかと考える。

【地域性】

- ・学校のクラスが2組しかなく、地域性ということもあり保育園からずっと一緒になるため、少人数の苦しさがあった。

子どもが学校に登校できなくなってしまう要因の一つには、友達とのかかわりといった人間関係に起因するものもあると推測される。新しい交友関係の中であれば学校へ登校することも可能になるということも十分に考えることができる。しかし、新た交友関係を築くことのできる場所を探し出すのは、離島という地域性もあって奄美大島では難しさもあることが伺える。

【親のストレス】

- ・バス通学だが、帰りは一人で帰ったらダメということもあり、親が迎えにいかないといけない状況。

子ども一人でのバス通学を認めている一方で、子ども一人での帰宅を禁じているという点について、親は矛盾を感じていることが伺えた。

ワークショップ内にて、母親への負担が集中しているといった話も聴くことができた。特定の一人に負担が集中してしまう事態を避けるため、第三者も交えて対応をともに考える場が必要と考える。

【昼食面】

- ・毎日の昼食についてはお惣菜を買って置いているようにしている状況。

学校に登校できない子どもがいる家庭では、毎日の食事の準備に関する親の切実な悩みがあることが聞き取れた。食事の準備にかかる時間・費用面への負担感は大きく、給食費の支払いに関する費用負担軽減、食事を自宅まで配達するサービス等を求める意見が多数あった。食事は子どもの健やかな健康に欠かせない大切なものであり、登校している子どもたちには学校給食が提供されている。一方で、学校に登校できない子どものいる家庭では親が食事に関する責任と負担を抱えている現状がうかがえた。親の悩みは、子どもや学校との対応に関するものにとどまらず、食事・経済面などの生活全般にわたっており、それが親の悩みをより大きくしていることが読み取れた。

【きょうだい児のフォロー】

- ・長子が学校を休んでいる場合、次子は保育園または学校へ行くことを抵抗するため、長子へのフォローが必要。

学校に登校できない子どもにきょうだい児がいる場合、きょうだい児への対応にも大きな難しさがあることが聞き取りを通してわかった。学校へ行けずに毎日家にいる子どもと一緒に生活するきょうだい児もまた、多くの悩みを抱えることになる。誰が・どのように説明するのがよいか、きょうだい児の年齢によってどの程度理解ができるのか、きょうだい児の心理的な負担へのサポート等、きょうだい児に対しても様々な対応が必要であると考えられる。また、きょうだい児への対応についても家庭の中だけでは困難であるため、学校や地域、専門機関等の協力が得られる環境の整備が

望まれると考える。

問2(ワーク②) 登校できなくなったときなど、子どもの居場所に関しての困りごとがあったとき、こういった社会資源があったら良いか、行政への要望、一緒に取り組んでいきたいこと

【経験者とのつながり】

- ・不登校の子どもの親の会につながれたことで心が救われた。

学校以外の居場所としてセルフヘルプグループ的な関わりを持つことで親も子どもも、周囲と繋がれたらいいのではないかと考えられる。

親の会の存在を知らない家族も多くいたことから、普及啓発して広く知ってもらうことで、同じ境遇を持つ親の居場所や心のよりどころになることが考えられる。

【オンラインの充実】

- ・オンラインでのつながりが充実しなかったと感じるため、オンラインを活用した勉強会などにも参加していきたい。

オンラインを使うことによって、学校に行かなくても家で授業を受けられる環境をつくれるのではないか。そのことが新たな居場所の創出に役立つのではないかという意見が見られた。

【居場所の選択】

- ・自宅など子どもが学習したい場所で学習できる環境（タブレットやチャレンジなど）が整うと良いなと感じた。また、送迎付きの居場所があれば良いなと感じた。

選択肢がたくさんあって選べる状況が理想であり、子どもが自分で選ぶのが一番いいのではないか。また通信制の学校のようなやり方ができてよいのではないか。

居場所があっても、送迎しなければならないといった負担も考えられる。

【普及・啓発】

- ・勤務時間や業務の調整など職場の理解が必要だと感じた。
- ・給食についても学校へ行けている子どもが対象であり、行けていない子どもには食事に関する配慮や給食費の負担軽減がない。このような状況を改善していくために、学校や地域の方々への理解を得ていくのは行政の役割だと感じた。

職場への理解を深めていくためにも、普及啓発について行政と協同して行くことが望ましいのではないかと考えられる。

当事者の声を届けるだけでも十分普及啓発になり得ると考えられる為、当事者与其他地域住民

の方々の間に行政が入って、同時者の声を届けるといった橋渡しの役割もできるのではないかと考えられる。

【新たな社会資源】

- ・第3者による自宅訪問型サポートや、社会資源の情報提供、学校以外にも居場所があることを示すルートマップなどのシステムがあると良い。加えて移住者に対しても全く知り合いがいない状況下で地域性との違いや育ってきた環境の違いで聞くにも聞けないようなことが気軽に相談できるような場所があると良い。
- ・また、フリースクールに通うための費用や給食費の負担制限、弁当屋で使えるチケット、宅配のようなサービスが充実すると嬉しい。

移住者への対応や両親への関わりに関して、民生委員や地域の方々等、既にある社会資源の活用を通して移住者と地元民との橋渡しをする窓口があれば、コミュニティが広がるのではないかと考えられる。